

# FaN Week 2023

記録集 Record Book

---



## ごあいさつ Foreword

「FaN Week」は、「アートと成長する都市・福岡」にするためのショーケースと位置づけ、アーティスト・市民・事業者が、相互にコラボレーションしながら、3者の「成長」を図ることを目的に、令和4年度から開催しています。

2回目となる今回は、Artist Cafe Fukuokaの体育館(Grand Studio)や、福岡城櫓などをアーティストの発表の場として活用しました。アーティストの成長支援につながる「福岡らしさ」を強調した試みを行い、多くの方に来場いただきました。

また今回は、Fukuoka Art Nextのパートナーである事業者の皆様のご協力もいただき、福岡の街中でアート作品の展示や販売、ワークショップ、イベントなどが開催されたことで、街がアートで彩られ、幅広い年代層の方々にご参加いただきました。

さらに、この期間に特別に集結した作品を通して、アーティストが投げかける「問い合わせ」や「想い」に触れ、アーティスト自身に興味を持つなど、アートファンになるとともに、「鑑賞眼」を育むきっかけに繋がったという方々も多くおられました。

「FaN Week」は、まちにアートの風を吹き込み、多くのアートファンをつくるとともに、福岡のアーティストにとって成長できる場として今後もさらに進化していきます。

最後になりましたが、今回の開催にあたり、貴重なコレクションをご貸与くださったアートコレクターの皆様と出展アーティストの方々をはじめ、多くの企業・団体・個人の皆様にご協力いただきましたこと、心より御礼申し上げます。

2023年10月 主催者

FaN Week is placed as a showcase for "Fukuoka, a city that grows with art" and has been held since 2022 with the aim of maturing the three parties - artists, citizens and businesses - through mutual collaboration.

For the second edition of FaN Week 2023, a large-scale artwork by the artist invited as artists-in-residence were exhibited in the gymnasium "Grand Studio" at the Artist Cafe Fukuoka, which was set up in a former junior high school building as a base for artists' exchange and growth. In addition, many artists who have their origins in Fukuoka exhibited their works using the turret in Fukuoka Castle Remains. As well as directly supporting artists to grow and develop in their practice, the exhibition also incorporated new approaches to emphasise Fukuoka's distinctiveness, which attracted a large number of visitors.

With the cooperation of Fukuoka Art Next's partner businesses, artworks were exhibited and sold and workshops and events were held throughout the city of Fukuoka, making the streets colourful with art and attracting people of all ages.

Many people said that through the works specially assembled for this period, they were able to experience not only the skill of the artists, but also the questions and thoughts posed by the artists, which led them to grow an interest in the artists themselves, to become art fans and to develop an "eye for appreciation".

FaN Week will continue to evolve further in the future as an opportunity where artists in Fukuoka can grow, while bringing a breeze of art to the city and creating many art fans.

Finally, we would like to thank all the collectors who loaned their valuable collections, the exhibiting artists, and the many companies, organisations and individuals who cooperated with us.

October 2023 Organizer

# FaN Week 2023

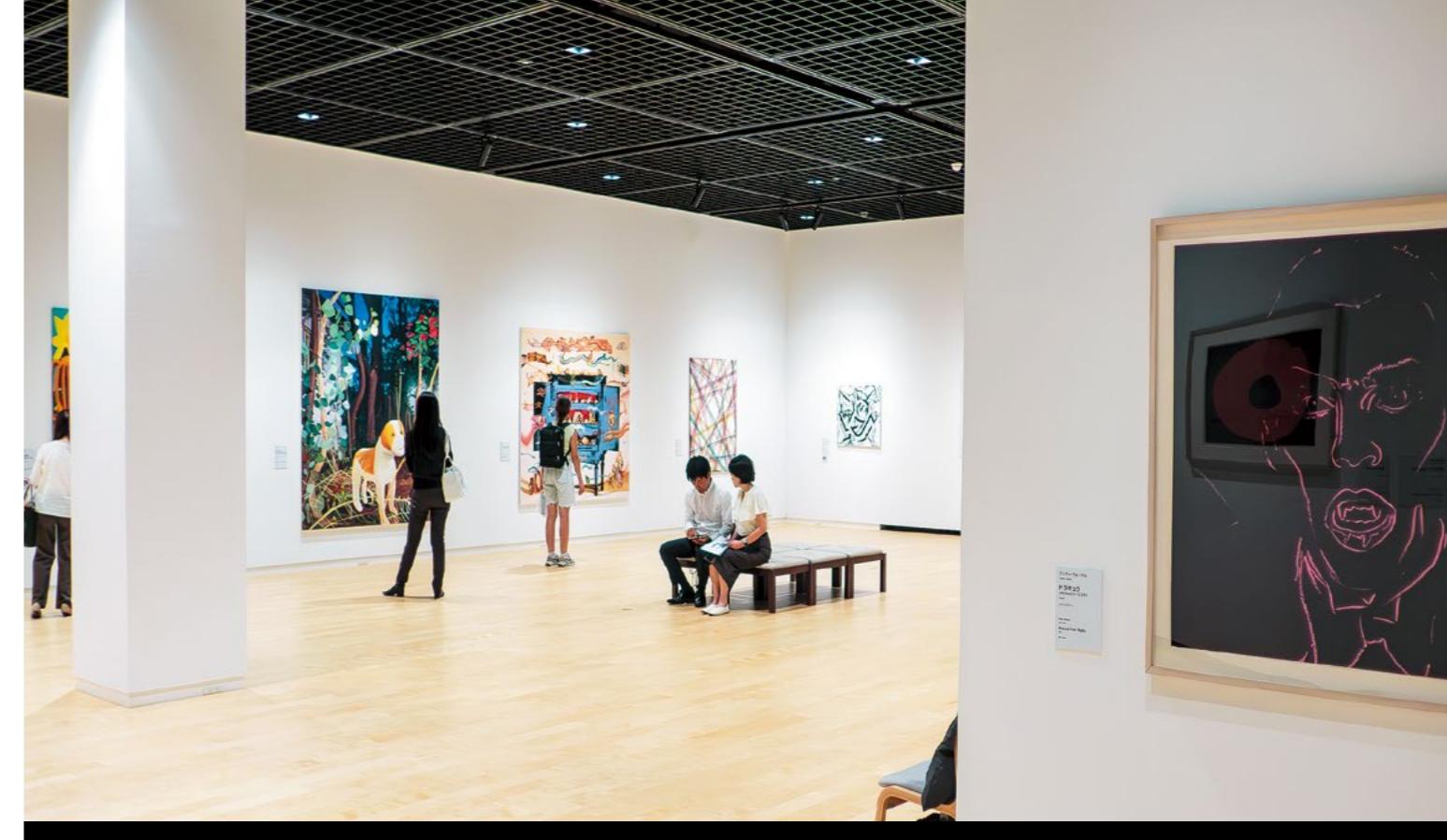
## 開催概要 Event Outline

# FaN Week 2023

会期	2023年9月16日(土)–10月22日(日)
会場	福岡市美術館／福岡アジア美術館／Artist Cafe Fukuoka／舞鶴公園 三ノ丸広場／(伝)潮見櫓／旧母里太兵衛邸長屋門／下之橋御門
主催	Fukuoka Art Next 推進委員会
チーフディレクター	宮津 大輔
Dates	Saturday 16 September – Sunday 22 October 2023
Venues	Fukuoka Art Museum, Fukuoka Asian Art Museum, Artist Cafe Fukuoka, Maizuru Park Sannomaru Square, Formerly known as Shiomi-Yagura Turret, Nagaya-Mon Gate (Former Gate to the Mansion of Mori Tahei) and Shimonohashi-Gomon Gate
Organised by	Fukuoka Art Next Promotion Committee
Chief Director	Daisuke Miyatsu

## 目次 Contents

- 01 ごあいさつ
- 02 開催概要 / 目次
- 03 Record 01 コレクターズII – アートと生きる3人 –
- 06 Record 02 塩田千春 新作公開
- 07 Record 03 福岡城アートプロジェクト I : 栗林隆+CINEMA CARAVAN
- 08 Record 04 福岡城アートプロジェクト II : 福岡現代作家ファイル2023
- 12 Record 05 福岡アジア美術館 第19回アーティスト・イン・レジデンスの成果展  
ダイアローグ: 交信する身体
- 16 Record 06 福岡アジア美術館開館25周年スペシャル企画  
福岡アジア美術館ベストコレクション
- 18 FaN Week 関連企画
- 20 出展作家略歴



## Record 01 コレクターズII –アートと生きる3人–

会期 | 2023年9月16日(土)–10月22日(日)  
会場 | 福岡市美術館 近現代美術室B

FaN Week期間中、市民の皆さんにも広くアートを鑑賞し楽しんでいただく機会として、福岡市美術館近現代美術室Bにて、3名のアートコレクターが所有する貴重な作品の展示を行った。



### Collector Profile



竹内 真

ビジョナル株式会社  
取締役CTO

1978年生まれ。富士ソフトに入社し、主に官公庁や大手通信会社向けのシステム開発に従事。インターネット業界で起業し、ビズリーチの創業準備期に参画。現在はビジョナル取締役CTO、および一般社団法人日本CTO協会理事を務める。



武富 恭美

建築家

1968年生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了後、2003年まで磯崎新アトリエ勤務。2001年ディーディーティー設立。邸宅、別荘から学校、文化施設まで多岐にわたる建築を手がける。2022年には設計した軽井沢安東美術館が開館した。



西高辻 信宏

太宰府天満宮 宮司

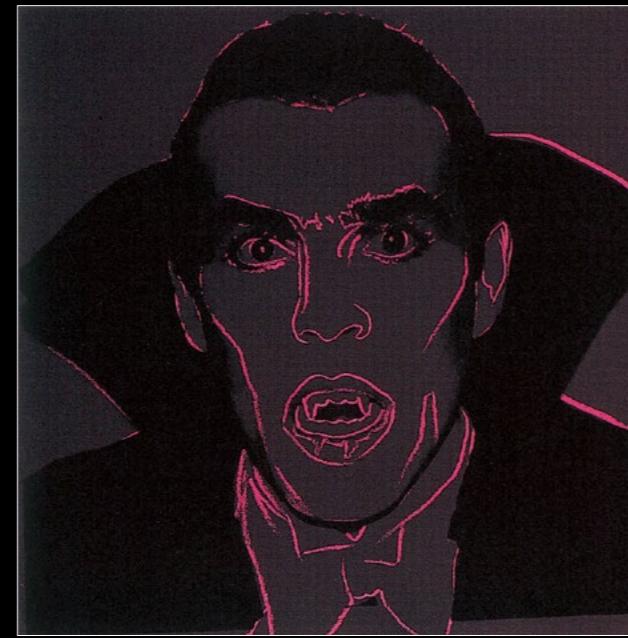
1980年生まれ。御祭神 菅原道真公から数えて40代目の子孫にあたる。東京大学で美術史学を専攻、帰福後はアート、デザインの視点からプロジェクトやまちづくりに携わる。2006年よりアーティストが太宰府での滞在を経て制作した作品を収蔵する「太宰府天満宮アートプログラム」を主宰。2019年より現職。



近藤亞樹《小さな種は大きな木になる》

2021年

Copyright the artist, Courtesy of ShugoArts,  
Photo by 奥山茂俊



Andy Warhol《Dracula from Myths》

1981年

© 2023 The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc. / Licensed by ARS,  
New York & JASPAR, Tokyo B0674



Simon Fujiwara《Around and Around Who Goes? (Social Media)》2022年

©Simon Fujiwara Courtesy of TARO NASU  
Photo by Yasushi Ichikawa

## <作品リスト>

### 竹内 真 (ビジョナル株式会社 取締役CTO)所蔵

作家名	生没	作品名	制作年	素材・技法
小西 紀行	1980年-	TK-18-089-D Untitled/ 1 Person	2018年	油彩・紙
大山 エンリコイサム	1983年-	FFIGURATI #328	2021年	エアゾルペイント、墨、ジェッソ・キャンバス・木製パネル
三浦 光雅	1997年-	void (all colors) 2	2021年	アクリル・キャンバス
近藤 亜樹	1987年-	小さな種は大きな木になる	2021年	アクリル・キャンバス
奈良 美智	1959年-	Star Beam	2018年	アクリル・木
今井 麗	1982年-	Nocturne, Vincent Van Dog	2021年	油彩・キャンバス
今津 景	1980年-	Curiosity cabinet from Ambon	2022年	油彩・キャンバス

### 武富 恒美 (建築家)所蔵

作家名	生没	作品名	制作年	素材・技法
磯崎 新	1931年-2022年	闇 4	1999年	シルクスクリーン
アンディ・ウォーホル	1928年-1987年	ドラキュラ (Mythsシリーズより)	1981年	シルクスクリーン
李 禹煥	1936年-	島より 6	1989年	カーボランダム・ドライポイント・リトグラフ
磯崎 新	1931年-2022年	サン・ジョルディ・スポーツ館	1985年	シルクスクリーン
吉原 治良	1905年-1972年	黒地に白い円	1969年	シルクスクリーン
吉原 治良	1905年-1972年	黒地に赤の円	1969年	シルクスクリーン
品川 亮	1987年-	芍薬	2020年	墨・和紙
品川 亮	1987年-	芍薬図	2022年	和紙に岩絵具、胡粉、墨、金箔、膠、アクリル

### 西高辻 信宏 (太宰府天満宮 宮司)所蔵

作家名	生没	作品名	制作年	素材・技法
ライアン・ガンダー	1976-	As if it had fallen from the page	2009年	
ライアン・ガンダー	1976-	Samson's push, or Counter Composition XV	2010年	
ライアン・ガンダー	1976-	NEW NEW DAYカード	2011-2023年	ミクストメディア
ライアン・ガンダー	1976-	Self fulfilling prophecies (From the world of George Remi)	2023年	
サイモン・フジワラ	1982-	Masks (Merkel)	2015年	キャンバスにメーキャップ
サイモン・フジワラ	1982-	Masks (Merkel)	2015年	キャンバスにメーキャップ
サイモン・フジワラ	1982-	Around and Around Who Goes? (Social Media)	2022年	アクリル・紙のコラージュ
サイモン・フジワラ	1982-	Designing Who? (Sustainable Baer)	2022年	鉛筆、パステル・紙

## Record 02

# 塩田千春 新作公開

会期 | 2023年9月16日(土) -

会場 | 福岡市美術館 近現代美術室C

日本を代表する現代美術家 塩田千春の新作《記憶をたどる船》が、福岡市美術館に、設置、収蔵された。福岡市美術館のために新たに構想され、福岡の歴史にちなんだ本作は、「FaN Week 2023」の開催にあわせ、9月16日(土)より、近現代美術室Cにて公開された。

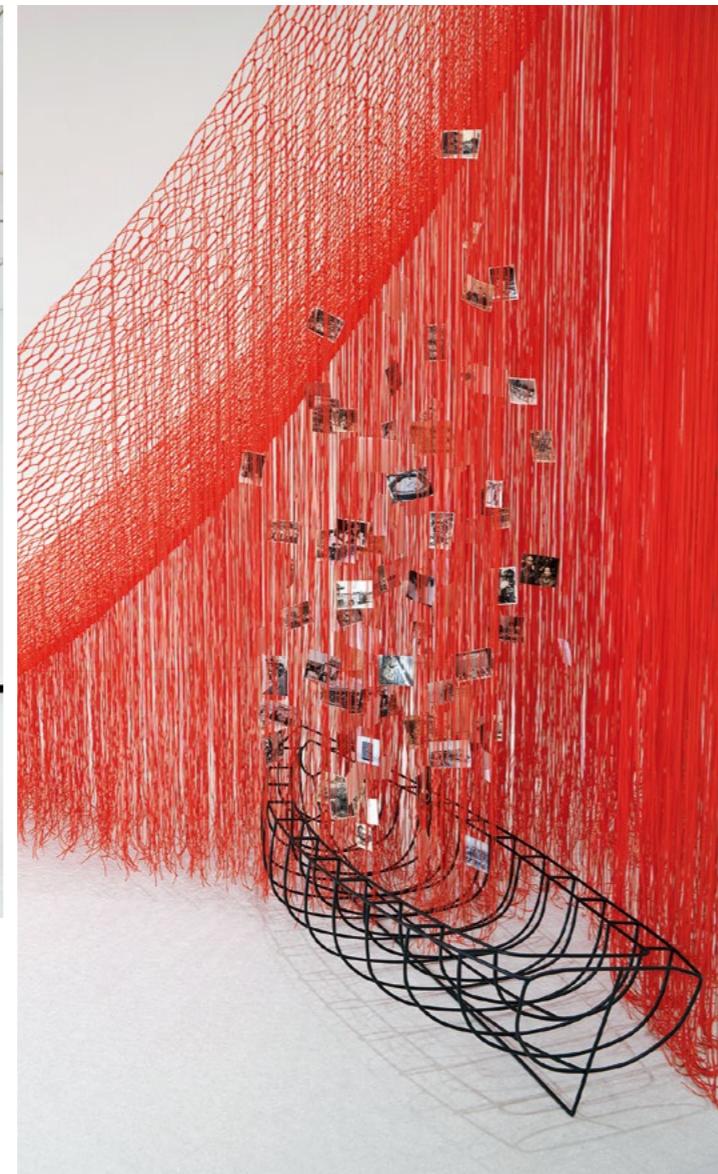
公開初日となった9月16日(土)には、トークイベントも開催された。



**記憶をたどる船**

2023年／ロープ、鉄棒、写真

巻物を広げたように斜めに広がる赤い網。そこから垂れ下がる無数の糸には、福岡の歴史にまつわるたくさんの写真が繋ぎとめられ、床には船が置かれている。古来船をとおして、人や荷物を運び、世界の人々や文化と繋がってきた福岡の地。無数の糸は、船がたどってきた航路や人の繋がりを示している。福岡の歴史や記憶、さらに未来への希望をあらわす、大型インсталレーション作品である。



(c)JASPAR, Tokyo, 2024 and Chiharu Shiota



## Record 03

# 福岡城アートプロジェクトI: 栗林隆 + CINEMA CARAVAN

会期 | 2023年9月16日(土) - 9月24日(日)

会場 | 舞鶴公園 三ノ丸広場

古くから外交の窓口として栄え、様々な交易が行われてきた福岡城史跡エリアの三ノ丸広場において、国際的に活動する栗林隆 + CINEMA CARAVANによる《元気炉》の稼働と《Tanker Project》を実施。タンカーの中央では、CINEMA CARAVAN プログラムとして、代表志津野 雷が世界を旅して切り取った記録を紡いだ映像作品《Play with the Earth》上映と Play with the Earth Orchestraによる生演奏や、Jazzy Sport DJによるライブなどが行われた。



## Tanker Project

2023年／木、蚊帳

本物のタンカーに地球のあらゆるエネルギーを載せ、世界を自由に航海するタンカー島の就航を目指し、実現への過程もプロジェクトの一部として、現実と仮想の海を航海する《Tanker Project》。「FaN Week 2023」では、エネルギーの象徴であるタンカー船を模った大型インスタレーションに、《元気炉》やCINEMA CARAVAN プログラムとともに、三ノ丸広場に集うあらゆる人たちのエネルギーを載せた。





Record 04

## 福岡城アートプロジェクトⅡ： 福岡現代作家ファイル2023

福岡を拠点として活動するアーティストが、福岡城櫓やArtist Cafe Fukuoka、福岡市美術館などにおいて、インスタレーション展示やパフォーマンスを行った。古くから様々な交易が行われてきた福岡城史跡エリアにおいて、エリアや立場、背景を超えて様々な作品が展開された。



### 鎌田 友介×オ・ソックン

会期 | 2023年9月16日(土)–10月22日(日)  
会場 | (伝)潮見櫓

韓国のアーティスト/写真家のオ・ソックンとの共同展示。1階に鎌田が津島アートファンタジア(2021)に出品した映像インスタレーションを再構築した作品を展示。2階には、オ・ソックンの新作写真作品を展示。



### Japanese Houses

2021年／(鎌田) 2チャンネルビデオ(8分12秒)、サウンド、韓国仁川市の日本家屋の柱材、作家蔵 (オ) Digital c-print, Dimension variable

本展示は、日本で活動する鎌田友介と韓国で活動するオ・ソックンの作品を並列して紹介する、日本では初の試みである。2019年に韓国で日本統治下の跡として現存している日本家屋(敵産家屋と呼ばれる)に注目があり、2019年以降も日本家屋をテーマにした共同展示や作品制作を積極的に行っており、本展は、1階では鎌田の映像インスタレーション、2階ではオの写真作品が展示されており、文化、歴史の多層性を、現在を生きるわたしたちがどのように引き受けるのか、日本家屋をめぐる両者の作品は訴えかける。

2

### チョン・ユギョン

会期 | 2023年9月16日(土)  
–10月22日(日)  
会場 | 旧母里太兵衛邸長屋門

韓国・朝鮮人の移動を歴史的に検証することで、恣意的に引かれた「境界線」に対する問いかけを目指す作品制作をしているチョン・ユギョンの新作インスタレーション作品を展示。展示された作品の什器は左官屋／アーティストの榎本留衣が制作を担当。



### OMURA-Yaki

2023年／陶磁器、泉山磁石、朝鮮カオリン、黒ボク土、真砂土、天草の土、福岡の土、漆喰、朝鮮の土



OMURA-Yakiとは、かつて「不法入国者」とされた韓国・朝鮮人を強制送還するために長崎県大村市に設置された「大村入国者収容所」(現 大村入国管理センター)と、佐賀県有田町の名産品である「有田焼」の歴史的背景を照合しながら制作された、インスタレーション作品である。本作は、境界線上で揺れ動く作者の実存を、泉山磁石、福岡・天草・朝鮮の土などの様々な素材と、1940年代、当時の鉄不足によって作られた陶磁製手榴弾から象った磁器に絵付けをして焼き上げられた「大村焼」を通して訴えかけており、先の戦争を眼前の問題として浮かび上がらせ、「戦争を知らない世代」という言葉ではこぼれ落ちてしまう視座があるのでないかと問いかける作品群である。

1



## 名もなき実昌

3

会期 | 2023年9月16日(土)–10月22日(日)  
会場 | 下之橋御門

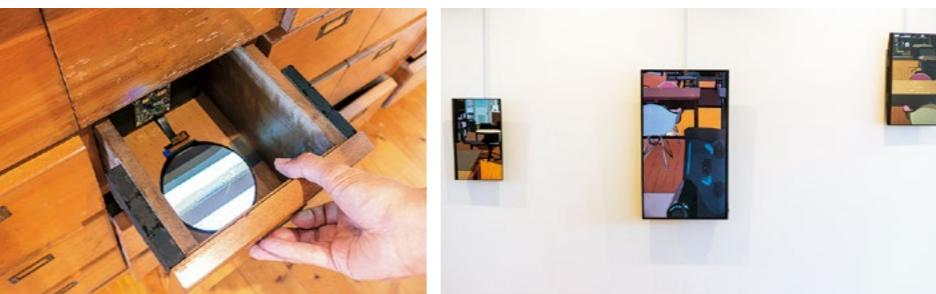
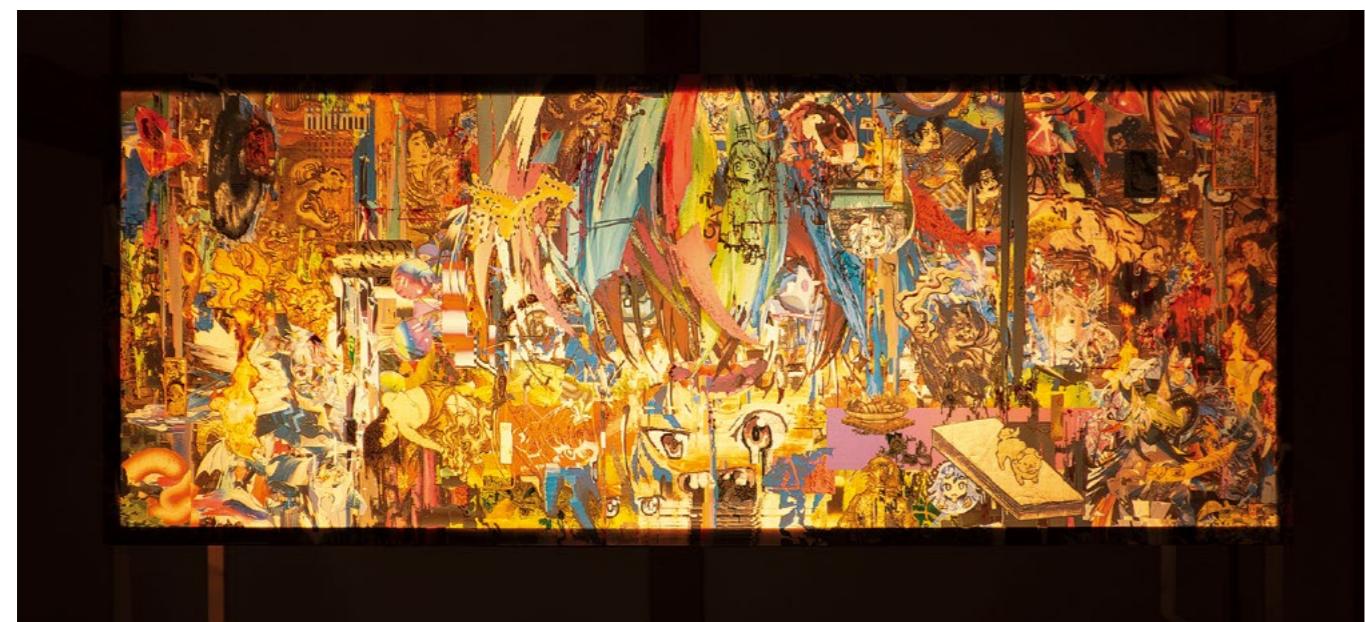
博多区の祭りである大浜流灌頂をモチーフにした作品や襖絵などの新作を発表。  
一部作品は、美術家の梅沢和木、陶芸家の堀江たくみとの共同制作。



## 空洞・幽霊のような\_(「ε:」)\_

2023年／ミクストメディア

堀江たくみとの往復書簡が刻まれた陶器、梅沢和木と共同制作で大浜流灌頂をモチーフにした絵画。そして最後に現れるねぶたなどの様々なキャラクターが描かれた襖絵。そのどれもが、明確に下之橋御門の中に存在しているはずなのに、何故かここにはないような気がしてしまう。燃えて修繕されて綺麗になってしまった下之橋御門。この建物の内部性は、どこに消えていったのだろうか。目前にいる澆刺としたキャラクターはやっぱり幽霊で、彼らの世界はどこか空洞のようだ。



## 長野 櫻子(anno lab)

4  
会期 | 2023年9月16日(土)  
–10月22日(日)  
会場 | Artist Cafe Fukuoka  
Community Space

長野櫻子によるアニメーション作品の展示。  
日常的に開放されているArtist Cafe Fukuoka  
の中に、11のアニメーション作品が現れる。

## Artist Cafe Fukuokaのための11の視点

2023年／モニター、メディアプレイヤー（ループアニメーション）

日常的にカフェとして開放されているスペースに突如として現れる11つのアニメーション。  
壁に設置されているものもあれば、天井にあたり、本棚に隠れているものもある。  
観かれている、と思い覗き返すとそこには人がおらず、無機質なアニメーション風景が  
淡々と流れている。全てを覗き返そうとしていくと徐々にカフェ内の景色ということに気づいていく。建物の視点から見るわたしの肖像は、少しずつ現実と非現実を融解していく。

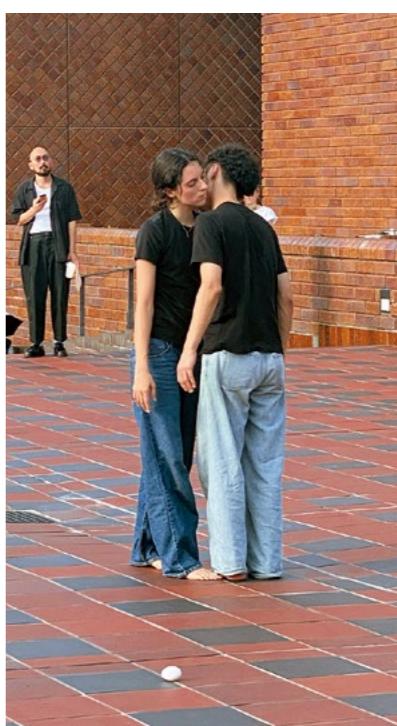
## ソー・ソウエン × サラ・ミリオ

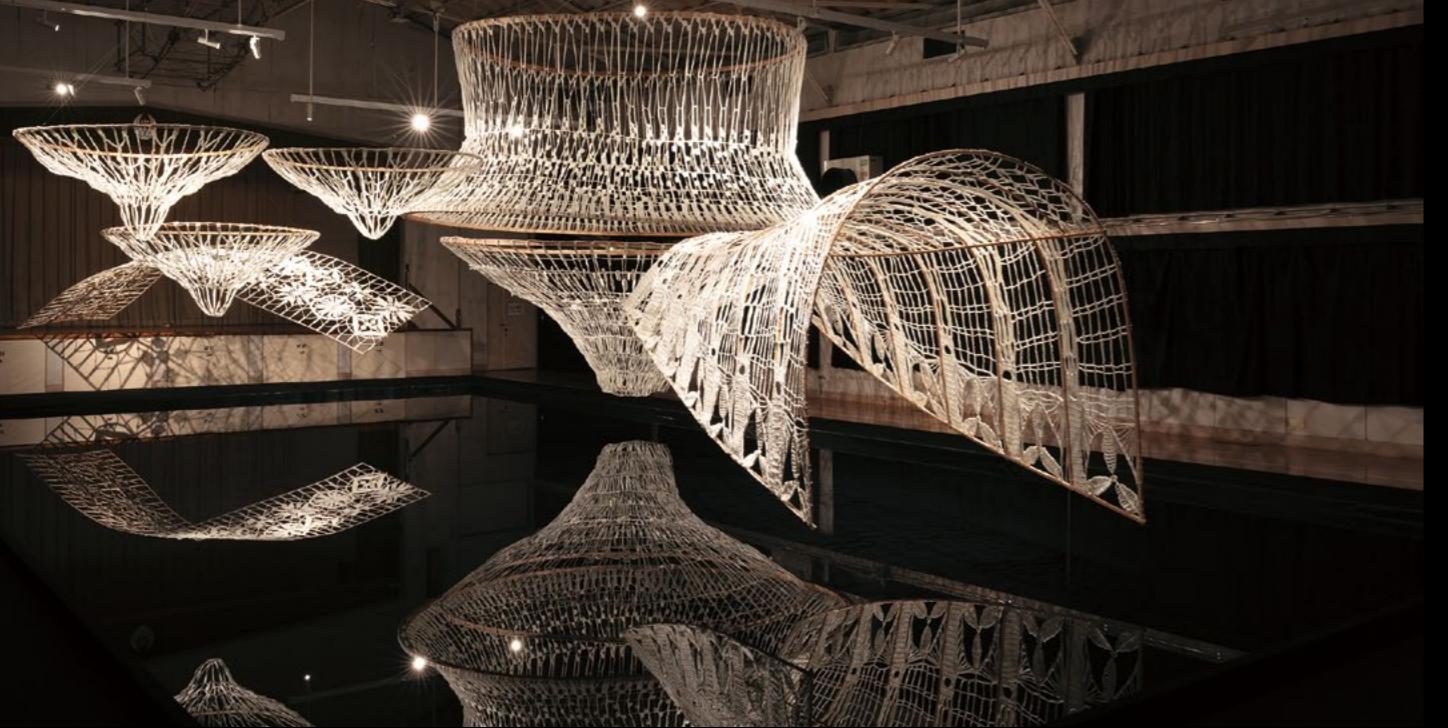
会期 | 2023年9月18日(月・祝)  
会場 | 福岡市美術館 エスプラナード

福岡市美術館のエスプラナードを舞台とし、ソー・ソウエンとアムステルダム、パリを拠点に活動するサラ・ミリオによる共同パフォーマンスが実施された。

## The Egg

概要生命の象徴である生卵を身体のくぼみに挟み、落とさないように動くこと、というルールのもと行われる本パフォーマンスは「卵」を介しながら自己と他者の繊細な関係を探り、大切なものを壊さないための身体の在り方を共同で模索する営みである。





Record 05

## 福岡アジア美術館 第19回 アーティスト・イン・レジデンスの成果展 ダイアローグ：交信する身体

2023年度の福岡アジア美術館アーティスト・イン・レジデンス事業(第Ⅰ期)には、山本聖子(福岡)、清水美帆(東京)、ジン・チェ&トーマス・シャイン[チェ+シャイン・アーキテクツ](アムステルダム)が参加。この3組のアーティストたちは、福岡でのレジデンスのなかで様々な場所を行き来し、ここで出会った人々の思いや歴史と交信したり、自分自身と向き合いながらダイアローグ(対話)を深めた。本展ではその成果が立体作品や映像を用いたインスタレーションとして発表された。



ジン・チェ&トーマス・シャイン  
(チェ+シャイン・アーキテクツ)

会期 | 2023年9月16日(土)-10月22日(日)

会場 | Artist Cafe Fukuoka Grand Studio

1

The Power of One 明鏡止水

2023年／ポリエステル製ひも、木材、水盤ほか

福岡に残る伝統的な寺社や庭園、工芸品などをモチーフに、福岡ならではの作品を構想。編み物得意とする100人以上の市民とともに1ヵ月以上の共同制作を行ったほか、プロフェッショナルな地元制作チームの協力を受けて、巨大な水盤を設置。水面に作品のイメージが美しく反射する、壮大なインスタレーション作品を完成させ、一人ひとりの力が世界を変えることができるというメッセージを伝えた。





## 2 清水 美帆

会期 | 2023年9月16日(土)–10月22日(日)  
会場 | Artist Cafe Fukuoka内 スタジオ、  
福岡アジア美術館 7階 アートカフェ/ロビー

福岡での3ヶ月間のレジデンスのなかで、九州各地の凧や凧名人として有名な鈴木召平氏などをリサーチし、オリジナルの凧を作ろうとした。その成果は、Artist Cafe Fukuokaにおいては、まるで凧の工房のような展示になり、福岡アジア美術館では《空の目》のインスタレーションになった。



### 空の目

2023年／布、竹、糸

かつてベトナムで制作した凧をもとに、新しいオリジナルの凧を福岡で制作。そのために、福岡のみならず、壱岐や長崎などに残る伝統的な凧をリサーチした。迫力のある目を意匠化した凧は、展覧会に展示されるだけでなく、愛宕浜で開催された凧揚げ大会において大空高く舞い上がり、文字通り《空の目》になった。



## 3 山本 聖子

会期 | 2023年9月16日(土)–10月22日(日)  
会場 | Artist Cafe Fukuoka内 スタジオ、  
福岡アジア美術館 7階 アートカフェ/ロビー

福岡で活動している山本聖子は、北九州にある旧八幡製鐵所を訪問し、関係者に話を聞いたり、製鐵所内で映像作品の撮影を行った。レジデンスの最後に開催した展覧会では、その迫力のある映像を3画面で構成したインスタレーションをArtist Cafe Fukuokaのギャラリーに展示したほか、会期中には、作品の前でパフォーマンスを行った。



### 白色の嘘、滲む赤

2023年／ビデオ(20分33秒)、  
鉄、コンクリート、塩水、チューブほか

鉄という素材に長年魅了されてきた山本は、日本の近代化を象徴する巨大な製鐵所をはじめ、ビルの解体現場や昔ながらの古い団地などを回り、作品のコンセプトを深めていった。そうして完成した作品は、まるで鉄を人間のように生まれて死ぬものとして表現した、力強い映像インスタレーションになった。



会期 | 2023年9月14日(木)–2024年4月9日(火)

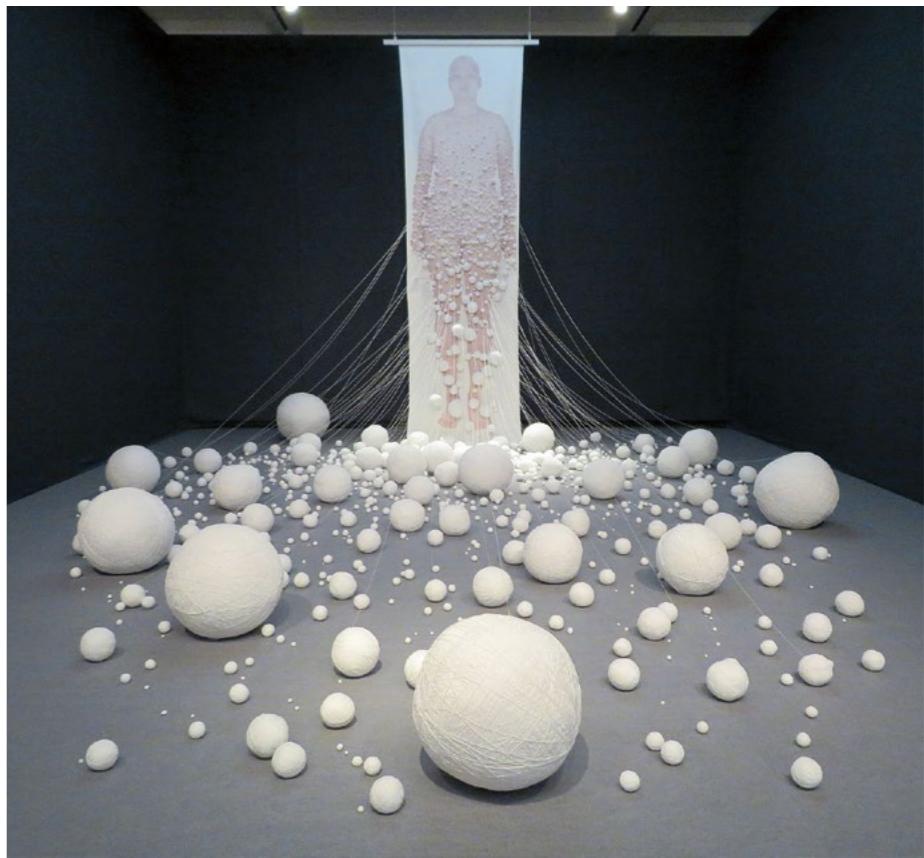
会場 | 福岡アジア美術館 アジアギャラリー(7階)

2024年3月6日に開館25周年を迎えることを記念した展覧会。

世界で初めてアジアの近現代美術に特化した美術館として、国内外の美術界から高い評価を得てきた歴史の結晶とも言えるコレクションを紹介。約5,000点の中から、福岡アジア美術館の「オールスター」とでも言うべきアーティスト10名の、代表作24点を展示。10名は、現代に生きるアーティストであり、世界で活躍することで母国のアートの評価を国際的に高めたり、自国の先進的なアートシーンをリードしてきたアーティスト。

なお、アジア現代アートの高みを示す24作品の魅力がより効果的に伝わり、且つ展示空間自体も来館者に驚きと樂しみを提供できるように、会場のレイアウトとデザインの工夫を行った。また、1階入口から期待感を高めるべく、エントランスやエレベーター内などの演出も実施した。

出品内容 作品:10作家24点／関連資料:写真4点、記録映像1点





## 出展作家略歴

### 塩田 千春 しおた ちはる

1972年大阪府生まれ。ベルリン在住。生と死、存在、記憶など、人間の根源的な問題をテーマに、赤や黒の糸を空間全体に張り巡らせた作品で知られる。  
2015年ヴェネチアビエンナーレ国際美術展日本館代表。  
2019年に森美術館で開催した個展「塩田千春展：魂がふるえる」では、入場者数66万人を記録。

### CINEMA CARAVAN シネマキャラバン

2010年に日本の神奈川県逗子市で開催された第一回逗子海岸映画祭を作り上げたメンバーを中心に発足。写真家：志津野雷を発起人としたアーティスト、ミュージシャン、画家、大工、料理人など様々なジャンルにまたがる人の集団としての側面、おとずれた地域の人や文化とコラボレーションを行い地域を活性化させる触媒としての側面、アートフェスティバルや映画祭で演出や空間づくりを行うコレクティブとしての側面、これらの様々な側面を併せ持つ人の集合体であり、プロジェクトでもある。培ってきた経験やつながりを自分たちのローカルに持ち帰り発展させ、それをまた旅先に還元する循環を生み出し続けている。

### オ・ソックン

1979年仁川生まれ。ノッティンガム・トrent大学Photography BA (Hons)卒業。写真家。個人的な記憶と集団的な記憶、そして戦争と植民地支配の歴史という現在進行形のトラウマの合流点を記録し、調査する活動を行っている。  
近年は韓国の仁川、釜山、光州に残る日本人が建設した日本家屋の変化を記録するプロジェクトを手がける。

### 名もなき実昌 なもなきさねまさ

1994年福岡県生まれ。X(旧Twitter)で取得したアカウント名で活動を開始し、その日視聴したアニメのドローイング、jpegをモチーフにしたペインティングを発表している。主にモチーフとするのは、アニメキャラクターやX(旧Twitter)などのSNSに投稿される断片的な情報や画像。インターネット上にある人格や画像と、アニメキャラクターの類似性をテーマに、画像的に解体されたキャラクターが「幽靈的」に偏在するイメージを表現している。

### ソー・ソウエン

1995年福岡県生まれ。2019年京都精華大学芸術学部造形学科洋画コース卒業。私たちの生にまつわる事象を身体との関わり合いを通して考察する絵画、インスタレーションやパフォーマンスを国内外にて発表。コロナ禍に始まったオランダ在住のサラ・ミリオとの共同プロジェクトや、銀座エルメスフォーラムにて内藤アガーテの作品を使用したパフォーマンスを実施するなど、独自の活動を展開している。  
2022年福岡アジア美術館レジデンスプログラムに招聘。

### ジン・チェ&トーマス・シャイン

【チェ+シャイン・アーキテクツ】

2003年、チェ+シャイン・アーキテクツ設立、アムステルダム在住。光を巧みに用いた作品や大型の送電線など、これまで大型のパブリックアートを数多く手掛けってきたアーティスト・ユニット。近年ではレース編みされた立体作品を屋外や川の上に設置し、公共空間へ詩的な介入を試みている。

### 山本 聖子 やまもと せいこ

1981年京都府生まれ。福岡市在住。子ども時代を過ごしたニュータウンでの生活や違和感から、表現を立ち上げてきたアーティスト。近年はそれをレジデンスなどで訪れた他の都市へと展開し、そこでの場所や人の生活を、参与観察などを通じて「気配の色」として捉え、映像、インスタレーション、彫刻など様々なメディアで制作している。

### 栗林 隆 くりばやし たかし

1968年長崎県生まれ。東西統合から間もない1993年よりドイツに滞在した頃より「境界」をテーマにドローイング、インスタレーション、映像など多様なメディアを使いながら作品を発表。現在は日本とインドネシアを往復しながら国際的に活動し、様々な展覧会に招聘されている。ドイツ、カッセルで開催された2022トクメンタ15(Cinema Caravan and Takashi Kurabayashiとして)では「蚊帳の外」を拠点に会期中にさまざまなイベントを行った。

### 鎌田 友介 かまた ゆうすけ

1984年神奈川県生まれ。2013年東京藝術大学大学院先端芸術表現修了。  
歴史や社会の状況を反映するとともに、国家の文化やアイデンティティ形成のツールにもなる建築をテーマに美術と建築を横断する活動を続ける。近年は日本占領下の韓国や台湾で作られた日本家屋やアメリカ合衆国で焼夷弾実験のために作られた日本村の設計などの調査を通じ、異なる歴史的背景と場所において日本家屋が孕んだ多様な意味を描き出すプロジェクトを手がける。

### チヨン・ユギョン

1991年兵庫県生まれ。2014年朝鮮大学校美術科卒業。  
2017年からソウルを拠点にしていたが、法律が変わり徴兵対象となつたため、2020年末に日本に帰国。以降は福岡に移住し作家活動をしている。作品では「朝鮮人」の移動の歴史を検証することで、恣意的に引かれる「境界線」や文化と侵略の関係などに対して問いかけていくことを目指しており、近年は有田焼や大村収容所の歴史を調査しながら作品発表をしている。

### 長野 櫻子 [anno lab] ながの さくらこ

1989年福岡県生まれ。福岡市在住。2016年広島市立大学芸術学研究科造形芸術専攻修了。現在、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)在籍。anno lab所属。動きを創造することや動きに興味を持ち、短編アニメーションや、アニメーションを用いたインスタレーション作品を制作している。  
2022年福岡アジア美術館レジデンスプログラムに招聘。  
令和5年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業採択。

### サラ・ミリオ

1996年イタリア生まれ。アムステルダム、インドネシアを拠点に活動。現在、アムステルダム、日本、ベルリンの間で様々なメディアを通して、コラボレーションをベースにした活動を行う。2019年ゲート・リートフェルト・アカデミー卒業後、主にアーティストのソー・ソウエンやニクラス・ビューシャーとのパフォーマンスプロジェクトや映像作品を発表し、並行してアムステルダムとバリを拠点に継続的なペインティングやドローイングの実践を続けている。

### 清水 美帆 しみず みほ

1976年東京都生まれ。東京在住。夢、人形劇、凧をテーマに、ライブイベントや映像作品の舞台セット、衣装などを手がけてきたアーティスト。  
近年は、夢、人形劇、凧をテーマにした作品を中心に、地域コミュニティや専門家との交流を通して制作、発表。

### FaN Week2023記録集

編集・発行	: Fukuoka Art Next推進委員会 (福岡市経済観光文化局文化振興部アートのまちづくり推進担当)
企画プロデュース	: 株式会社Zero-Ten
デザイン	: 株式会社利助オフィス
発行年	: 2024年
著作権	: Fukuoka Art Next推進委員会、アーティスト
写真提供	: 福岡市美術館(6ページ) 株式会社利助オフィス(3ページ上段、8~10ページ、11ページ上段) 福岡アジア美術館(12~17ページ) 一般社団法人アートフェアアジア福岡(18ページ上段) 公益財団法人福岡市文化芸術振興財団(18ページ下段) Click Coffee Works、参加各店舗(19ページ)